

学校評価計画

令和4年度 学校自己評価シート

福生市立福生第二中学校 校長 小出 宏 印

学校教育目標 人間尊重の精神に基づき、創造性に満ち、心身の向上をめざして、他と協力できる個性豊かな実践力のある人間を育成する。
 ○豊かな心と知性を養う ○強い意志と体力を育てる ○勤労意欲と責任感を培う (○印は、本年度の重点事項)

目指す学校像(ビジョン・ミッション) 保護者及び地域と協働し、生徒一人一人が将来、社会的・職業的に自立し、役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現するための基盤となる力を身に付けることをめざす。
 めざす生徒の姿 — 義務教育修了までに身に付けさせたい姿勢・態度 —
 I 考えを深め豊かに表現する生徒 II 生命を尊重し心身を鍛え健全に生活する生徒 III 自分自身と自分が関わるすべての人を大切にしている生徒 IV 将来を見据え見通しをもって学び行動する生徒

| 【目指す学校像】 | 【目指す教師像】 | 【目指す生徒像】 | 【その他 特記事項】 |
|--|--|---|---|
| 生徒一人一人が大切にされ、成長する機会を与えられる学校。また、生徒・保護者・地域社会から信頼され、協力関係に支えられた学校。 | ・生徒一人一人の可能性を引き出し伸ばすことのできる教師 ・常に教師としての力量を高めようと努力する教師 (生徒理解、学力向上、保護者・地域連携) | I 考えを深め豊かに表現する生徒 II 生命を尊重し心身を鍛え健全に生活する生徒 III 自分自身と自分が関わるすべての人を大切にしている生徒 IV 将来を見据え見通しをもって学び行動する生徒 | <最も重視して培うべき資質・能力> ① 豊かな言語能力 ② 計画的に行動する力 |

| 領域 | 三ヵ年経営目標 | 本年度経営目標 | 目標達成のための方策 | 取組指標(教職員の取組) | 取組自己評価 | | | | 成果指標(児童・生徒等の実容・成果) | 成果自己評価 | | | | 分析・改善策 |
|-------------|--|--|---|---|-------------|--|--|-------------|---|---|----|----|----|--------|
| | | | | | 当初 | 中期 | 年間 | 評価 | | 当初 | 中期 | 年間 | 評価 | |
| 授業力の向上 | 全教員が、令和3・4年度市・研究奨励校としての研究テーマ「主体的に学ぶ生徒を育てるための工夫～生涯にわたって能動的に学び続けられる力を育成するために～」に基づいた授業改善を行うこと。 指鑑 生徒アンケート 保護者アンケート 福生市学力・学習状況調査 | 単元全体を貫くねらいと一単位時間の内容のつながり、まとめや振り返り等を工夫することで、生徒が主体的に取り組むようになる。また、発表終了後も成果を学習指導のスタンダードとして授業改善を継続する。 | * 外部講師を招聘した校内研修会の実施。 * 教科の特性を踏まえて編成した4つの研究グループでの活動により、単元指導計画や評価の充実を図る。 * 管理職による授業観察の実施及び指導、校内OJT計画に基づいた研修の実施。 | O 教員の達成状況 100% A " 80% B " 50% C " 50%未満 | 目標 B A O | 達成 B A | O 生徒・保護者の肯定評価 90%以上 A " 80% B " 60% C " 60%未満 | 目標 B A O | 達成 A O | 生徒による授業アンケート「先生は数時間にわたる単元や題材全体で学ばせ『めあて・テーマ』を示している。』肯定的評価が92.3%、同じく「先生の毎時間の授業では、タブレット端末を活用したり、映像資料などを提示して学ぶ場面がある。』肯定的評価86.2%であった。 昨年度に比し、それぞれ肯定的評価の割合が高まった。最終的な目標である主体的な学習の実現については、研究発表後もこの取組を継続していく必要がある。特に「個別最適な学び」についての工夫が重要である。 | | | | |
| | | この取組を通してICTを活用した生徒一人一人の学習状況の把握、またそれに基づいた複線的な学習が可能となる課題の提示、さらにinput中心の授業からoutput中心の授業への転換を図る。 | O 教員の達成状況 100% A " 80%以上 B " 50% C " 50%未満 | 目標 B A O | 達成 B A | O 生徒・保護者の肯定評価 90%以上 A " 80% B " 60% C " 60%未満 | 目標 B A A | 達成 A A | | | | | | |
| 健全育成 | 令和4・5年度不登校児童・生徒支援調査研究校として「魅力ある学校づくり」をめざし、研究テーマ「一人一人の生徒が夢や希望をもって生活する学校づくり」のもと、教師との信頼関係の確立、不登校の未然防止等に取り組む。 | 生徒との信頼関係を基本とした指導をめざす。生徒の思いや家庭状況等を深く理解することで生徒との信頼関係づくりを行う。 | 生徒との交換ノート(自分ログ)の取組等を行う。また、OJTを充実させ肯定的評価や励ましにより生徒が前向きになれる言葉かけを実践できるようにする。 | O 教員の達成状況 100% A " 80% B " 50% C " 50%未満 | 目標 B A O | 達成 B A | 生徒アンケート「学校には相談できる教職員がいる。』肯定的評価80%、保護者アンケート「学校には子供が相談できる教職員がいる」肯定的評価83%であった。この評価は、限りなく100%に近づけなければならない。より一層の努力が必要である。 | 目標 B A O | 達成 B A | 保護者アンケート「教職員は、教育公務員としてふさわしい人権感覚をもち、子供及び保護者に適切に接している。』肯定的評価81%である。コンプライアンスに基づいた対応等を確立し、さらに高い評価が得られるように努力が必要である。 | | | | |
| | | 「魅力ある学校づくり」の取組として、生徒の主体的な活動を支援し、「絆づくり」に取り組む。 | 生徒の良い行い等(Good Action)を積極的に評価し見える化する取組を行う。この取組を生徒会の年3回のふれあい月間での活動に合わせて実施することで効果を高める。 | O 教員の達成状況 100% A " 80% B " 50% C " 50%未満 | 目標 B A O | 達成 B A | 年度後半、各学年ごとに「絆づくり」の取組を実施した。いじめアンケートとともに「絆づくり」の取組の低かった回答に着目し、次年度の活動を計画し実行する年間3回のPDCAを繰り返すことを始めた。次年度もこの取組を継続し「魅力ある学校づくり」の成果を検証する。 | 目標 B A O | 達成 B A | 生徒アンケートによると、本校の二大行事への満足度は高く、また生徒会活動への参加も意欲的であることが分かる。今後は、より主体的な活動になるように各担当が工夫を重ねていくことが必要である。 | | | | |
| 教職員の資質・能力向上 | 目標の共有による一体感の醸成。 人権感覚と深い生徒理解に基づいた対応。 地域社会との連携を積極的に図ろうとする教員の育成。 | 目標・ねらいを理解・共有した教育活動を展開する。 | 起案等において、「企画・起案様式」を用いた「めざす生徒の姿」との関連を確認させ、手立て及び効果を明確にする。 | O 教員の達成状況 100% A " 80% B " 50% C " 50%未満 | 目標 B A O | 達成 B A | 新規採用及び転入者に対し、「企画・起案様式」を用いた起案等の考え方を浸透させることができた。 | 目標 B A O | 達成 B A | 「企画・起案様式」への記載そのものが形骸化する恐れがある。次年度は現在取り組んでいる「魅力あ学校づくり」を実現していくための新たな目標設定と手立てを盛り込むように指導する。 | | | | |
| | | 人権感覚と深い生徒理解に基づいた指導を実現する。 | 授業観察、自己申告面接、ミニ研修等のOJTにより、校区の特色である外国人、ヤングケアラー、ジェンダー等への理解を深めさせる。 | O 目標の達成状況 100% A " 80%以上 B " 50% C " 50%未満 | 目標 B A O | 達成 B A | 研修は順調に実施され教職員の意識が高まっている。男女混合名簿の実施について、すでに実施している学校の情報を参考に次年度の扱いを決定することができた。 アンケート「学校には相談できる教職員がいる」肯定的評価 生徒 80.0% 保護者 83.0% | 目標 B A O | 達成 B A | 令和5年度より男女混合名簿に移行する。次年度は実施後の課題等に対応。教員の人権感覚は常に更新する必要がある。次年度以降も継続的に研修を実施していく。 | | | | |
| | | 地域社会の思いや願いを受け止めることのできる教員を育成する。 | 学校支援地域組織の活動について、関連分掌を積極関与させ、地域とともに歩む学校の在り方について広い視野で発想できるようにする。 | O 目標の達成状況 100% A " 80%以上 B " 50% C " 50%未満 | 目標 B A O | 達成 B A | 美化ボランティアを11月末に実施した。生徒約90名が参加し加美平グラウンドの清掃活動を行った。避難所運営に関する生徒参加型イベントは、1年生を対象に1月に実施することができた。 | 目標 B A O | 達成 B A | 予定していた美化活動、防災教育(避難所運営)、学校評価等を滞りなく実施することができた。CSの活動内容に対応して担当教員を割り当てることは管理職以外の教員の意識を高められ地域から好評である。 | | | | |
| 二校区の連携推進 | | コロナ禍により過去2年間交流が停滞した。今年度は、校区の教員が一堂に会する機会を2回設定した。この機会を捉えコロナ以前の交流を復活させる。 | 校区の教員が一堂に会する教員交流会を設定し、分科会ごとに情報交換と校区としての今後取り組むべき課題を検討する。 | O 目標の達成状況 100% A " 80%以上 B " 50% C " 50%未満 | 目標 B A A | 達成 B A | 年間2回設定された交流会を実施し、校区として取り組むべき課題について意見交換することができた。次年度に向け管理職・幹部職員間で会議を行い、交流会で出された課題等を整理し次年度の活動について検討することができた。 | 目標 B A A | 年度末に各校の校長、教務主任、生活主任が集まり分科会で協議されたことを具現化するための協議会を開催した。次年度以降もこのような場を設定し、意思決定と取組の具体化を確実に実行する。 | | | | | |